朧

桃井 ヨシキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
朧

【コード】
N6223P

【作者名】
桃井 ヨシキ

【あらすじ】
とある噂を試した少年、その結末は。

針で刺されるような冷たい空気が僕の全身を包んでいる。澄み切った夜空の真南に白っぽい満月が浮かんでいた。寒々とした光は屋上を照らし出している。白い満月に漆塗りに金細工の施された手鏡をかざす。

「朧さま、御出てください」

朧さまを呼び出す呪文だ。朧さま、満月の夜、漆塗りの手鏡をかざすと、朧さまが現れて醒めない幸せな夢を見せてくれる。よくある都市伝説だが、ここ数ヶ月、この街では満月の夜に原因不明の死者が出ている。しかも全員心臓麻痺だ。

そんな噂を知っていて、おまけに先日、フリーマーケットで曰くつきの手鏡を買った。店主のおばさん曰く、満月にかざして、朧さま御出てくださいと言えば、朧さまが現れるらしい。

受験、受験で息が詰まりそうになっている中学生の暇つぶしにはピッタリだった。それでわざわざ人目を盗んで、

近所の雑居ビルの屋上くんだりまできたのだ。もちろん醒めない幸せな夢と言うのも興味がある。勉強にも飽きたし、苦もなく、醒めない幸せな夢を見えるのなら、是非見てみたかった。

と言っても、何の反応もない。都市伝説は所詮、都市伝説にすぎない。齡、十五にしてまた一つ賢くなった。そう思っただけで帰ろうとしたときだった。

「……私を呼んだのはお前か？」

鈴の音のような高音が耳に残る少女の声、僕の後方から聞こえるはずのない声が聞こえた。と言うか聞こえたらシャレにならない類のものだ。僕の背筋に冷たい汗が一筋流れる。誰かの気配がする。今までそんなものまっただけだったのに。

機械人形のようにぎこちなく僕は振り返った。そこに彼女は立っていた。黒地に真っ赤な彼岸花が染め抜かれた浴衣を着ている。体

つきは華奢で肉付きも薄い。綺麗な鼻筋に猫のように丸い目をして
いる。

僕とは何の面識もない。この娘が噂の隴さまなのだろうか？

「あなたは？」

僕の口から出たのはあなたは誰ですかというごく普通の疑問だっ
た。だが脈は速く、頭からは血の気が引いていく。寒いはずなのだ
が、全く寒気は感じない。

「まったく、呼び出したのはお前だろう」

「隴さま？」

「いかにも」

面倒くさいことこの上ない口調で隴さまは答えた。浴衣の脇から
扇子を取り出すと口元を覆うように広げた。黒字に白い蝶があしら
われている。

この人が僕に醒めることのない幸せな夢を見せてくれるのだろうか。そう思うと鼓動がますます早くなる。しかしずいぶん人間くさ
い人だと思う。

「醒めない幸せな夢を見せてくれるんですか？」

「すまんがその話何処で聞いた？」

「ネットと、ロコミですが」

隴さまは僕の質問に質問で返してきた。そのため僕が隴さまの質
問に答える形になる。扇子越しに隴さまがため息をつくのがわかっ
た。隴さまは猫のような丸い目で僕の目を見つめていた。

「少年、年は幾つだ」

「十五ですが？」

「名前は？」

「宗治です」

職務質問のような受け答えをした後、隴さまは疲れた様子で言葉
を口にした。その目は満月を見つめている。

「では宗治くん、キミの望みは何だ？」

「幸せな夢がみたいです」

「それは死か？」

醒めない幸せな夢、つまり朧さまに殺されることよって永遠に幸せな夢を見れる。この先、どうなるかもわからない。僕の能力じや、そこそこの高校、大学、フリーター、明るい未来なんて見えな。い。だったら今死ぬのもいいかも知れない。そんな思いで僕は朧さまを呼び出したのだ。

「ええ、楽にしてください」

「私は死神じゃないよ宗治くん」

口にするのも嫌と言う感じだった。視線を月から僕に戻す。ため息をついて僕を見つめる。

「間違った噂が広がっているようだ。私は人の願いを叶える魔人だ。もう人は殺したくない」

戦場に借り出され兵士のような台詞だった。朧さまは空いている手をじつと見つめている。

「五十、これまで私が殺した人だ」

薄い笑いを浮かべていた。どこか悲しげな顔だった。取調室で罪の告白をする殺人犯はこんな表情をするのだろうか。

「みんな笑顔だった。苦しみから解放された穏やかな顔だった」

悲しげな目で満月を見あげていた。その声は少し悔やんでいるようにも思えた。

「……ここでもな」

そう言うと、朧さまは視線を落とした。恐らくここでも一人殺したのだらう。地面の一点を朧さまはじつと見つめている。殺した男はそこで穏やかな笑みを浮かべて死んでいたのだらう。

「だけどな宗治くん、私の気持ちかわかるか？」

目は釣りあがっていた。悲しみを堪えた怒りの表情、美術の教科書で見た阿修羅像に似た表情だ。押し殺した声で続ける。

「人を殺し続ける、私の気持ちか」

心の底から思いをぶちまけるように朧さまは言葉を吐いた。

「人を幸せにするはずの魔人が人殺し、耐え切れられるか！」

両手と両膝を地面につけて四つん這いで震えていた。どのくらいの間が経ったのだろうか冷たい風が僕と臙さまの間に吹いた。殺すことが人を幸せにする、手を下す側にとっては堪ったものではない。僕もそれを望んでいたからあまり偉そうにはいえぬ。

「すまん、取り乱した」

立ち上がると、浴衣の裾を手で払う。そして僕のほうを見つめる。

「なあ、宗治、一つ提案がある。お前の願いを保留にする。今から一月の間、私の力でこの世界での充実した生を味わせてやる。それでも、なお死にたいのなら私はキミを殺す」

一呼吸おいて扇子を畳む、そして刀の切っ先を突きつけるように扇子で僕を指す。

「だが、考えが変わったのなら、私と共に生きてみる。どうだ乗ってみないか？」

「面白そうですね」

今死んでしまうよりも、臙さまの提案に乗るほうが面白いかもしれない。どうせ死ぬのはいつでも出来るここは臙さまの話に乗ってみるのもいいかも知れない。破顔一笑というのだろうか満面の笑みを臙さまは浮かべていた。

「よろしく頼むぞ、宗治」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6223p/>

朧

2010年12月21日01時10分発行